

村野次郎創刊

香 蘭

二〇二〇年(令和二年)七月一日発行(毎月一回一日発行)

香 蘭

第九十七卷第七号



2020年(令和2年)7月号

第 97 卷

第 7 号

通卷 1075 号



香 蘭

2020年(令和2年)7月号
第97巻 第7号 通巻1075号

目 次

	村野次郎作品 私の愛誦歌(59)	長野道子	表二
	作品二、三特選(五月号)	長田・加瀬・高田・中村(か)・牧田・松沢・有馬	
		田中・田村・中村(よ)・能城・原(よ)・三神・小原	2
	一		5
	二		24
	三		32
	推薦香蘭集		42
	香蘭集		43
	歌の生まれる場所(90)	松沢みどり	19
	村野次郎への旅(124)	千々和久幸	20
	特別転載 吉井勇著『現代名歌選』(昭和二十年刊)より		22
	エッセイ・自由研究 「榎柑島の展墓」	河野慎二	48
	私の読む現代短歌(2) 前川佐美雄の悲しみ(上)	田中あさひ	52
	焦 点(五月号)「発見のある歌」	渡辺礼比子	54
	作品一特選欄評(五月号)	桜井京子	56
	作品一	伊藤美恵子	58
	作品二	満木好美	60
	作品三	高橋登喜	62
	香蘭集	庄司健造	64
	七首抄(五月号)	奥田・渡辺(礼)・室橋・小林(純)	66
	緑地帯	大井田・中村(美)・武藤・富原・小林(純)・山下(純)	67
	文法あれこれ(14)	田中あさひ	72
	歌集管見 小谷博泰歌集『河口域の精霊たち』評	桜井京子	74
	歌集管見 林和子歌集『ヒヤシンスハウス』評	石井雅子	75
	他誌拝見 115	斎藤俊子	76
	他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向		77
	歌会及び会合・他		80
	編集後記・新宿日記		82
	表紙絵	中村 陽子「重なり合って」	表三
		目次・緑地帯カット	和雄

長野道子

夏ちかき街の夕べの風あかりこころすがしく

髪かりてかへる

『樗風集』

私が、村野次郎の短歌の中で一番好きなのは「あてどなきあくがれかなしあはあはと今日も消けのこる夕明よふあけりの空」である。

今回は、掲載月の七月に心情を重ねて選んだところ、やはり『樗風集』にあった。

正直に書けば、文庫版『樗風集』の千々和久幸代表の解説に惹かれ、水先案内人のように歌集の理解、鑑賞に浸って学んできた。白紙になったの鑑賞もよいが、こうした形で読みが深まり、拡がりを与えてくれた小論に出会ったことも喜びだと思っている。

私は、「風あかり」(夕明ゆふあけり)とあかりに對して私の中の闇に、陰に、ほうと灯してくれる歌を渴望しているようだ。

季節の移ろいの中で「髪かりてかへる」という、ささやかな行為が、次郎の生活の「あかり」だったのかもしれない。それは、まぎれもなく、私の「あかり」になった。

(短歌新聞社文庫『樗風集』87頁所収。『村野次郎三百首』には掲載されていない)

四 選 者 の 作 品

クルナコロナ 平塚 千々和 久幸

春一番吹きしか知らず黄昏をまとい陸橋渡りて帰る

玉繩に河津ざくらが咲いたよと石部金吉からのメールが

混沌としてとりとめもなかりけるコロナ、コロナでひと日が暮れて

爪を切り耳垢を取り卵茹でコロナ休暇をわが満喫す

冷蔵庫でワインとこおろぎが鳴いているコロナクルナ、クルナコロナと

喜喜としてテレビにコロナ禍告げにくる小池都知事が衣装を変えて

穂の芽の天麩羅あてに痛飲す今日なに「こともなさざりしわれ

「また」ですかと言われそれつきり黙したり「また」が過剰であることは知る

その果ては 鎌倉 香山 静子

人類の驕りに怒れる神ならん天災・疫病・その果ては何

チャンネルを廻せどこも新型のコロナ・ウイルスの話の続く

葉ざくらとなりたる道を歩みゆくマスクを付けて俯いたまま

コロナ・ウイルスを思ひつつゆく道の辺に春の蝶々しろじろと飛ぶ

ウイルスに関りなしと鴨一羽春の水面を滑るごとく過ぐ

ウイルスの恐怖はあれどそれはそれせめて眺めんつつじの朱を

陽に光る新緑の道を歩みゆくひとときコロナの怖さを忘れ
深閑と静もる巷 笑顔もて共に語るはいつの日ならん

マ ス ク 我孫子 丸山 三枝子

東京を指してゆく雲その下に籠もりいるらん悲しみの人

今はただ悲しみたまえ悲しみを秘して語らぬ君にしあれば

喪に服する人も巻き込みどこまでも蔓延りやまぬコロナウイルス

三月の常磐線に揺られおり人を疑うマスクをかけて

緊急事態宣言ききつつ神妙に腰痛体操しているあたし

そして四月 人に移さぬマスクかけ誰もが戦きいるよ電車に

テレワークの娘夫婦と休校の二年坊主はどうしているか

何もせぬゆえに疲れし身に沁みて雨ふりきたり今日の終りに

乱 舞 東京 桜井 京子

マンシヨンの庭を飾つてうすあをきクリスマスローズみんな俯く

六十余年生き来しわれのどの春とも違ふ春来つコロナ禍の春

失せものを探し続けて日の暮れぬ緊急事態宣言前夜

連れ合ひがコロナ鬱になりましたあれもこれも中止、延期になつて

わたくしが自粛してあるあひだにも誰かが働きアマゾンが来る

岸に来てカモメの乱舞をみてゐたり乱れたいのはわたしも同じ

待つもののありて華やくわがこころ明日は玄関マットが届く

リフォームをしたばかりなる天井に紙魚ひとつめて面白からず

作品二、三特選



(五月号作品から)

香山 静子 選

〈作品二〉

先生冥利 長野 長田 庸子

「先生」と号泣せるは手をやきしかつての教え子先生冥利

卒塔婆の梵字にたちくる兄の像男の気概通しし一念

湯気のむこうおぼろに浮かぶ家族四人 今宵二人で囲むかき鍋

・人間への厚い信頼感がある。

コロナウイルス 東京 加瀬 喜美江

消毒の液を振りかけ擦るたび吾が手の小皺の増えゆくなんて
見えない恐怖の続く春なりコロナウイルス地球を襲う

今欲しいマスクのために並びたりマスクマスクと背から押される

・コロナウイルスへの強い恐怖感が見える。

綿の実 鎌倉 高田 みちえ

感染の予防せよとのお達しあれどマスクはあらず消え失せてをり

けふからは夕飯の皿洗ひます 並並ならぬ決意表明

聞きながら「聞かぬ」総理の厚顔より「聞こえぬ」老人我等万歳

・軽い批判精神によって作品に厚みが加わった。

白 線 福岡 中村 かよ子

平等にウイルスの闇の広がりに不思議な平和がふいに顔出す

軍服も白衣もニツカボツカも見分けがつかないウイルスだから

人がみな地球のくしゃみを待つように身を屈めてる一点見つめ

・軽いジョークの中に不安感が漂っている。

雛ひなの夜 藤沢 牧田 明子

永遠を信じて逝きたる母よりの便りを待ちぬ 夕焼けの空

母の呼ぶこゑにふりむく早春の庭の日溜り風すぐるのみ

まろやかなりし母の味へと何足さむ酔の香たたしむる雛ひなの夜は

・抑えた言葉の奥から悲しみが滲み出ている。

私と共に さいたま 松沢 みどり

欲しいもの探せば何でも手に入る大型スーパー好きではなくて
リビングのソファアの下に落ちている豆を齧って掃除を終える

アクセルから足を離せど知らぬ間に進んでしまうような一日

・自在な発想に魅力がある。

〈作品三〉

ラ・カンパネラ 長崎 有馬 智賀子

ゆうまぐれ納骨堂に灯のともりステンドグラスの藤の花がゆ

鶴鴿の尾に白々と風がきて飛び立つときの綾なす模様

暖冬といえども寒のさかりにて相応の形で街を行く人

・物を視る眼が確かて描写も優れている。

うぐひすの木 東京 田中 あさひ

花も実も主張しすぎないことを尊ばれてゐるといふ噂

たれの敵にもならぬ生きかた 花ちさく実も点ほつちの《うぐひすかぐら》

《うぐひすの木》とも呼ばれる低木の立つわが庭に春よ来い来い

・目立たぬ程度に作者自身が投影されている。

白 佗 助 東京 田村 久美

裸木は枝を広げてみずからの体を空に解き放ちたり

前をゆく人影揺るるあはあはと冬の優しき夕日の中に

欠品の薬局ばかりでわが脳裏に響ける「マスク狂奏曲」は

・何ものにも捉われぬ自在な発想を買う。

春うらら 東京 中村 陽子

道端の倒れた自転車春うらら眠つて見えたり死んで見えたり

春のまど大きくあけて青空にラムネのビー玉カラカラ鳴らす

ひかり降るパステルカラーの街角をマフラーはずし歩く立春

・素材を見る角度が個性的。

くすつと笑う 三鷹 能城 春美

利休忌に菜の花いけて写メールし美味しそうねと誉められており

奥様のランチ五千とご主人のランチ五百に同じ円つく

真夜中は花粉飛ばぬと言うからに星空の下シートひろげる

・独特のユーモアに支えられた作品。

強 風 尾道 原 よし子

強風に枝打ち鳴らす雑木木の小枝飛び散り時に窓打つ

真夜うなる風は裏山ゆさぶりに闇に飛ぶ音吼ゆるがごとし

暖冬を押しつけ突と冬將軍風猛らせて流水連れ来る

・自然という対象を詠む十分な力量を備えている。

回想・冬 愛知 三神 進

息白く吐いては逸れた通学路霜柱踏む音聞きたく

沓脱ぎは裸まつりを俯瞰することく暴れる幼児等の靴

写る雲割いて水脈引く二羽の鴨水掻く速さを首に伝えて

・状況を伝える豊かな描写力がある。

一切なりゆき 鎌倉 小原 裕光

コンビニのイトインにて食事する増税分の贅沢せんと

市庁舎の移ると聞きし予定地はアワダチ草の黄の花の原

地下鉄の若者鞆を横抱きにスマホチェックに余念のあらず

・発想に視野の広さを感じる。

「ザムボア」と次郎（十六）

千々和久幸

「ザムボア」（朱樂）第四卷第六號（1918、大正7年）の巻頭に突如掲載された、北原白秋の「別れの言葉」（紫煙草舎の解散宣言）について、舎友からの正面切った反応は見当たらない。いや意外に平静に受け止められていることが、誌面の雰囲気から察し取れる。わたしは「突如」と思わず書いてしまつたが、ここに至るまでには誌面には記されてはいない、結社内部の複雑な経緯があつた筈である。

後に引く島田旭彦の『閻魔の咳』を見つめながら』には、こんなくだりがある。

先生はかうした我儘ものの私をさへ育んで下すつたのだから、他は推して知るべしである。その證憑には、舊紫煙草舎解散當時に、一旦宣言された御快心を撤回され、うるさい毀譽褒貶をも一切お構へなく、私ども舎友の

爲めに、「曼陀羅」を導いて下すつたではないか。「朱樂」をこれまでにもり育てられたではないか。私どもは寧ろ感謝の言葉に苦しむ……私は頭が一杯でもう何もいふことができない。

こんな記述を読めば、今回の解散が必ずしも「突如」ではなかつたことが窺える。島田の文章に従えば、今回の解散と前回の解散の事情を承知していなければ、今回の解散について軽々しい物言いは謹まねばならぬ。

とにあれここでは、同号の巻末にある島田旭彦の『閻魔の咳』を見つめながら』と河野慎吾の「別れに臨んで」を引いておく。

まず島田旭彦の『閻魔の咳』を見つめながら』から。

貧しい書齋にはもつたない額面……それは「朱樂」復活號の巻頭に異彩を放つて、私ども

の前途に光明と暗示とを與へて下すつた先生御自筆の『閻魔の咳』である。先生はかほど迄に私共の將來を思はれて、慈母のやうにいつくしんで下すつた。

私どもはこの御厚恩に對しても、益々發奮精進しなければならぬ。

『閻魔の咳』……何んといふ高貴さだ。そして精巧さだ。私どもはこの崇高な『閻魔の咳』を口繪にして、「朱樂」を復活させた時の喜悅を忘るることができない。まつたく未來永劫念頭を去つてたまるものか。これは單に私ばかりではあるまい。先生のいつくしみに育つて來た諸兄の誰れでもがそうだらうと思ふ。

私どもはほんとうに幸福だつた。と今更に私は行きこし方を思ひなやまなければならなくなつた。（中略）

私情としてはお別れしたくない、何時迄も、何時までも、「朱樂」を導いて戴きたいのだが、いろいろ御事情を伺ふと、ムリにおひきとめすることもできない。涙を飲みながら茲に不文を綴つて、お別れ申さねばならなくなつたのを真から悲しむ。而し先生が專念詩壇に獅子吼されんとする矢さきに、不吉な涙を零してはすまないことである。私はもう何も

いはない。(中略)

先生、私どもは只御厚恩に報ゆる一事あるのみです。「朱樂」を大雑誌にして、先生に喜んで戴く日を楽しみに、一致協力してやりとげるほかありません。(中略)

先生、それから奥様！それでは御身大切に、詩壇に目ざましく獅子吼される日を待つてゐます。而してお別れするのはやつぱり名残惜しい。

ここで島田の言う「閻魔の咳」について注しておけば、これは「ザムボア」(朱樂)復活號(大正七年一月號)所収の、北原白秋の口繪を指す。口繪の次の頁には次の二首が掲げられている。

閻魔の咳

・冬の光しんかんとして眞竹原閻魔大王の咳しんかんきこゆ

・口赤き閻魔大王前の敷しんかんとして雀のせどり

続いて慎吾の「別れに臨んで」から引く。

北原白秋様

別れの言葉を読んで泣きました。寂しく、たまらなくなつて泣きました。私たちを今まで大きな愛の手のなかに抱擁して下さつたのは、まことに、あなたの限りなき慈悲の心からでした。苦しいときも、嬉しいときも俱に私達を慰めかつ励まして下さつた。全く他の詩社には見られない愛と眞實と禮節とがあつた。

今あなたは歌壇を去られる。それは極まりなく寂しくかなしい。また斯壇にとつても大きな損失である。けれどもあなたの初念を鈍らせ阻むことは私達の通ではない。涙を流すはかへつて、あなたの心意こころにそむくかも知れませむ。いまは涙を拭つて、かがやきに満ちた先達の雄々しき門出に萬歳を叫ばなければならぬ。(中略)

あなたの顧問辭任のお手紙に接した、その翌日東京幹部同人が事務所集つて、今後の方針及びあなたの意向を告げて熟議を致しました。その結果大體は従前通りの方針でやることになりました。あなたから主宰者として私を御推選に預り、また同人からも同様の提議がありました。私は未だ其の任でない事

を告げて辭退を致しました。ただ今後の編輯及び詠草の取捨は私に全部一任して戴き、毎月の編輯事務は従前の通り村野君と二人でやる事になりました。庶務はやはり島田君の手を煩はすことになりました(中略)

島田旭彦と河野慎吾の文章は、ともに真情の溢れた情緒的なトーンで綴られている。それだけに舎友の真情は理解出来ても、辭任に至つた客観的な事情や合理的な理由は見えな。い。いずれにせよ「ザムボア」は、これより新たな歴史を刻むことになる。

次郎が編輯に戻つてきた次号は、遅滞なく發行されている。

「ザムボア」(朱樂)第四卷第七號は、大正七年(1918年)七月七日發行、編輯兼發行者は、北原章子から河野慎吾に変わつてゐる。その他に異同はなく、表紙の噴水、裏繪の鶏も従前通り白秋のものである。

作品欄では河野慎吾の「初夏」、村野次郎の「雜詠」各八首が巻頭に掲載されている。この号にいつもの広告はなく、奥付を含めて32頁。白秋の辭任に泣いた前号の雰囲気はなく、整然たる再出發であつた。